

南島民間神話の問題

山下欣一

(一) はじめに

わが国南島における民間説話群を概観する時、特出するのは周知の如く、始原を語る説話群の存在である。これらには神話的要素を含み、断片的存在形式をとるものも多くあるが、その特色とするのは民間に口頭で伝承されてきたものである。もちろん、南島における神話群は琉球王府編纂の正史類に記載されているものもある。これらをここでは王朝神話群と呼び、民間に口頭で伝承されたものは区分し、民間に口頭で伝承されてきているものを民間神話群と呼ぶことにする。民間神話の概念的規定については、南島の民間説話群を全体的に把握することの前提から検討をはじめ、これらの説話群から神話的要素（国土の創造、人類の起源、農耕の起源など）を内包する説話群を抽出、分析してその存在形式を確定していくべきものと考え、今までも若干の試みを行なってきた。

ここでは、わが国南島における民間神話群について、その存在形式に関する理解をさらに深めるための検討を試みることにしたい。このために、まず南島の民間説話群がそのモチーフを「神聖なる話」として機能させる傾向を指摘することにした。そして、次に民間神話群が必然的に内包している「始原を語る」ことについて検

討し、これらが保有する機能の一つとしての「秩序を保持する」点などについて若干の要約を行なってみることにしたい。

(二) 神聖なる話群

南島における天人女房系の説話群は特殊な存在形式を保持している。特に、北部琉球圏すなわち奄美諸島、沖縄諸島においては、幾多の versions を見出すことができる。これらについて要約して示せば次の通りになる。

(1) 奄美諸島

① 難題再会型が多い。

② 始祖型もある。

(2) 沖縄諸島

① 天女昇天型が多い。

そして、また、これらの要約とは別に奄美諸島にはアモレウナグという天女が山奥の泉近くに降下し、忽然として姿を消す話群がある。これらは、沖縄諸島の天女昇天型と共通するモチーフを有するものと考えられる。また沖縄諸島にも天女が降下し発見された泉の話が豊富に伝承されている。これらの事例群からその一部を紹介してみよう。

① 奄美大島電郷町嘉渡

嘉渡の川の上流にはアモレウナグの体を洗ったという岩がある。この岩の中央はへこんでいる。ある女の人がここで髪を洗ったところひどい頭痛がしたという。⁽¹⁾

② 『琉球国旧記』附卷卷之四「泉井」には次のように記載がある。

〔真和志郡〕

天日川（在二牧志邑辺。昔天女。降三干此二洗玉手。時有二徳千代者。見之始此。）

これは一例にすぎないが、まだ多くの事例群をあげることができ。特に南風原間切与那原村には天人降下の伝承が集中しているのは注目していいものがある。奄美のアモレウナグと『琉球国旧記』の記載の天人が井泉にて沐浴するという話は共通の類型とみていいものがある。さらに、これらの天人女房譚が琉球五府の正史にも察度五統の始祖の話として記載されているのであれば、ここで取扱っている天人女房譚は南島人にとっては説話だけに止まらない受容がなされている点を考慮すべきであろうと考えられる。すでにアモレウナグや沖繩の天人の話については、天人女房譚の冒頭のモチーフが「神の示現する話」または「神の話」としての性格を保持している点をユタの成巫過程の儀礼との対応を図式的に比較して例示しつつ提示したことがある。「神の話」または「神聖なる話」はモチーフとして独立して南島人の精神的基層にある民俗宗教の神觀念の表象としての話となっているものであるべきであろう。このように検討してみると、『球陽』や『大島筆記』などに南風原村与那原の井泉に天人が降臨した話が事実譚、言うならば世間話として

記録された理由、はたまた琉球王府の正史に登載され王統の始祖譚となる理由の一端を理解できるのではないかと思われるのである。倉塚暉子氏は琉球の天人女房譚は神女の説話化であろうと指摘している。⁽³⁾ 琉球の神女といえば、神の女であったことはよく知られており、女性は靈的優越性を保持していたのであった。従って、ここで言う天人降下のモチーフが「神の話」または「神聖な話」という理解なしにはこのようにして記録されたり、奄美におけるように今なお口頭伝承となっていることについては、説明することはできるものであろう。最近真下厚氏は「宮古島漲水御嶽伝承の位相」という論文を発表されている。いわゆる漲水御嶽は芋環型の蛇婿入譚であるが、これらの類話二十七話を集成し、これらを出産再会型と流産型の二大区分に分類して、その形成について狩俣の大城御嶽の起源説話との比較において、これらがまず狩俣の大城御嶽の起源説話である芋環型でない蛇婿入譚が存在していたが、平良という一大政治勢力の拠点で文化的に開かれた地に伝播してきた芋環型の蛇婿入の話し型によって大きく変容し、新たな伝承として定着し、さらには近代に至って村芝居と新しい刺戟を受けて成長、展開をとげたと考えられるのであるとしている。⁽⁴⁾ 本論文は宮古狩俣大城御嶽の起源伝承を古型とみて漲水御嶽のそれと比較検討した点に着目の斬新さを見ることのできる。ただ、われわれは出産再会型と流産型の話し型としての確定とその話し型の比較と変化の検討と分布についての考察がまず第一に必要なことを知る必要がある。換言すれば、流産型は奄美・沖繩諸島にも分布するが、これらの諸島においても宮古諸島での検討とおなじような比較の条件を可能にするかということに問題点があるからである。なお真下氏は本論文において宮古諸島における二十七話の集成を発表、展開、結末、伝承事情で表示をし

(5) ている。この二十七話の発端は共通して美女に内通する男性(蛇)というモチーフを有しており、これらは神婚の話である点は疑問のないものである。まず、これらの話で重要なのは真下氏も指摘の通り、この発端として表示した部分であろうかと考えられる。南島の日光感精説話群、天人女房型の話群、蛇罨入の話群の神と女性の婚姻、天女の聖なる泉への降下という説話群の表象の意味は要約してみれば「神の示現する話」、「神聖なる話」としての部分であることに気づくのである。これらの部分のモチーフが不変である点において南島の説話群の真実の話への傾斜という特色を検証できると考えるものである。

(三) 始原を語る

沖繩本島石川市山城は現在「ヤマシロ」と呼ぶが古くは「ヤマグシク」と呼んでいたという。口頭伝承によると、石川市伊波の大屋門中の血を引く三兄弟が現在ウタキ(ウガミ)と呼ぶ海拔七十メートルぐらいの丘陵に住みついたことから山城は始まるとされている。この三兄弟の長男は現在の前殿内、次男は安平、三男は下庫理屋阿といわれ、それぞれ門中を構成し、三ムトウと称している。村の戸数が二三戸。一八戸をこの三ムトウが占め、加えて四十戸は安平門中の女系の血縁という。山城におけるウマチーは現在初ウマチー、六月ウマチー、ワタクシウマチー、八月ウマチーの四回実施している。山城は聞得大君―饒保大アムシラレの管轄区域で伊波ノロの支配下にあった。ウマチーは、伊波ノロはカーブヤ(冠草)を頭に巻き、神衣裳を着て、騎馬でやってくるものであった。三―四人の供が付き、一人は太鼓を鳴らしていたという。三ムトウ

ヤからはクディングワが出てウマチーは行なうが、現在伊波ノロはこない。しかし、伊波ノロと供のものの坐席と思われる場所には木の葉を敷き、ウタキの中の殿で行なわれる。クディングワなどの神人たちが、殿へ上るのは長男家の前殿内から、次に安平一門、下庫理屋阿一門の順序で続いていくことが守られている。また、ウマチーの中のワタクシウマチーは旧六月二十五日に行なわれるが、このワタクシウマチーに先だって、安平、下庫理屋阿の門中が合同で、大城の代表として石川市嘉手苅在の前ヌテイラ、赤ビンジリなどを参拝する。前ヌテイラは鐘乳洞で、洞内には広場があって、香炉が三十基ほどある。ここで祈願のあと、両門中から男性が一名宛出て、天井近くの鐘乳石にシマの繁栄を祈るした「盛り藁」をかけてヒヤッヒヤッとかけ声をかけて引っぱり合う。この鐘乳石は男性、「盛り藁」は女性の象徴と考えられている。そしてこの鐘乳洞は昔北山王怕尼芝に亡ぼされた仲宗根若按司が身を隠した場所といわれている。そのあとこの遺子は伊波の娘と夫婦となり男三人を産み、伊波城を築いたとい、山城はこの系統のものがシマ建てをしたという伝承があるという。またこの山城は文献を参照しても三世紀以上は軽く廻ることができるとされている。

以上簡単ではあったが沖繩本島石川市山城の島建てとウマチーの関連を提示してみたのである。この例示について、さらに島建て説話とウマチーの関連を要約すると次の通りになる。

山城の島建て説話

①北山王怕尼芝に亡ぼされた仲宗根若按司の遺子が身を隠したのが石川市嘉手苅の前ヌテイラという鐘乳洞で、この遺子が伊波の娘と夫婦になり、男三人を産み、伊波城を築いた。山城はこの系統

が鳥建てをした。

②石川市伊波の大屋門中の血を引く三兄弟がウタキに住みついて山城の鳥建てをした。

この二話は①と②とは相関連していたものであったものと推定される。次にこれらは、鳥建て説話として、単なる口承のみの説話でなく、次の如く山城におけるウマチーという祭祀と門中組織において機能していることを知ることができるので、これらを次に要約してみよう。

①山城の鳥建てをした三兄弟の家は次の如き門中である。

長男家——前殿内

次男家——安平

三男家——下庫理屋阿

②これらの門中は神人(クディングワ、ミクンダイ、ウメーイ、ピントイなど)を出し本家であるムトウヤの毎月旧暦一日、旧暦十五日のお茶湯やウマチーに参加する。そして、殿におけるウマチーに上る順序は長男家、次男家、三男家の順に上る。

③ワタクシウマチーの先に石川市嘉手刈の前ヌテイラという鐘乳洞を参拝するが、これは山城の鳥建てをした系統の先祖を参拝する意味を持つことが理解できる。

このように要約してみると理解できるように南島の小なる集落における基層的な觀念の表象の特出して内包するのに、まず「始原への遡及」があることが指摘できよう。それは、まず「始原を語る」という鳥建て説話として伝承されている。そして、山城におけるが如く、村落組織やウマチーという村落祭祀においても一貫して意識されており、これらの共通した意識と理解のもとに祭祀が実修され

ていることになる。さらにまた、石川市嘉手刈の前ヌテイラにワタクシウマチーの前に参拝するのにも鳥建ての説話がその参拝の意味を与えているものである。

従って、このように検討を進めてみる限りにおいて、山城における鳥建て説話は、その伝承の基盤に門中組織や村落の祭祀であるウマチーの実修における意味づけを行なうことに機能しているのである。このことは、また、山城という集落の社会組織の秩序の保持を意味しているものと考えられる。

われわれはこのような検討を通じて洞窟に逃れた貴種の遺子の系統を引く山城の鳥建て説話において南島の説話群の内包し、その機能として保持している一側面を注目することができると思う。

南島の民間神話群は、ここに例示したような南島の説話群の特性を基盤にして成立していることはほぼ間違いない点であろう。

このことについて、一九八一年に刊行された南島関係の昔話集を二冊取りあげてさらに検討してみることにしよう。

まず宮古島の『上野村の昔話』についてみよう。本書の解説において佐渡山安公氏が指摘しているが、昔話集であるがの中には神話的要素を持つ話群が多いの気づくのである。本書では「昔話」「笑話」「伝統」という三大区分をして集録しているが、その話数は次の通りである。

①昔話 二十六話 ②笑話十三話 ③伝説 二十七話 総計六十六話となっている。これについて総話数六十六話から見ると①昔話39% ②笑話20% ③伝説41%となつて、若干日本本土における昔話集とはその構成を相違することが理解できる。さらに、③の伝説には次のような話群がある。宮古島を創り始めた話、宮古神々の誕生、人間のはじまり、犬聲入りなどがあって、宮古島の創世神話や

宮古人の起源などが話されている。これらは文獻に記載されている宮古島創世の神話とはそのモチーフは類型を示すが、口頭伝承としての説話の形式を持つものであって当然南島の民間神話群として検討すべきものである。

次に沖繩本島読谷村長浜の民話集についてみよう。本民話集は①動物昔話 ②本格昔話 ③笑話 ④伝統 ⑤歌謡から構成されている。そして総話数一二六話で、その内訳は①動物昔話七話 ②本格昔話五二話 ③笑話二十話 ④伝統四五話 ⑤歌謡二 かなってゐる。その割合をみると、①動物昔話は5.5% ②本格昔話41.3% ③笑話15.9% ④伝説35.5% ⑤歌謡1.6%となっている。前記の宮古島上野村の民話集と比較すると伝説がややその割合を減じているが、総話数と比較すると相当数の割合を示している。そして伝説をみると沖繩のはじまり二話、アーマンチュの話、長浜のはじまりの話、稲作のはじまりの話などがあり、特に沖繩のはじまりの話は古宇利島型の兄妹相姦始祖の話群、長浜のはじまりの話には北山按司の次男の金松が戦乱を逃れて長浜に落ちてきて、ある洞窟に住んでいるのを妹のウトチルが訪ねてきて二人で長浜を開いたという話で兄妹相姦始祖が暗示されている話である。この話は石川市山城の島建て説話①に例示した北山王怕尼芝に亡ぼされた仲宗根若按司の遺子が身を隠したのが洞窟であった点と類型を示す話として注目しているものである。さらに稲作のはじまりの話は穂落神の伝承と同一のものである。また登山修氏がまとめた奄美大島南部瀬戸内町の昔話集によると総話数一二一話に対し神話伝説は三四話で28%を示している。これは瀬戸内町におけるこれらの類話の代表的なものを集載したので、その数はもっと多くなるということである。

(四) 要約

以上わが国南島における民間神話についての問題として神聖なる話、始原を語るという二点から若干の事例に即して検討を試みてみたのであり、さらには近刊の昔話集などから宮古、沖繩、奄美の説話群における神話的要素を持つものが現在でも口頭で伝承されている点を概観してみたのである。ここでの試みはその一端であり、さらには全般的な視野のもとに総合的な検討を進めるべきであると考えるのである。

註

- (1) 一九八一年十月十一日聞書
- (2) 拙稿「天人女房について―奄美の伝承を中心に―」『解釈と鑑賞』十二月号 一九八一 至文堂 拙稿「南島歌謡からみたる風土記」『日本文学』十月号 一九八一 日本文学協会など参照
- (3) 倉塚暉子『巫女の文化』八頁―六頁 一九七九 平凡社
- (4) 真下厚「宮古島漲水御嶽伝承の位相」『ゆがたい―宮古島の民話第三集―』一七七頁―一九三頁 一九八一 宮古民話の会
- (5) 右同書 一七九頁―一八四頁
- (6) 一九八〇年十月二十五日 早稲田大学にて開催の日本口承文芸学会秋季研究例会において本研究発表に際し大林太良氏からここでいう神觀念についての質問があった。現在のところ一般的に超越的存在として南島人の理解する神という把握をしておきたいと考えているが、さらにこの点については明確な概念規定を試みてみたい。また開敬吾氏は「天人女房」がAT四〇〇に対応するとされているが、AT四〇〇は「失踪した女房を探す男」であって、むしろ「天人女房」の後半が対応するのである点

を指摘され、前半の部分について今後の検討をなすべきことを強調された。記して両氏に謝意を表すものである。

(7)山城正夫「継承されてきた祭祀とその意味性―石川市山城のウマチーについて―」『地域と文化』第9号 二頁―六頁 一九八一 地域と文化編集委員会

(8)上野村教育委員会『上野村の民話』一九八一年

(9)読谷村教育委員会歴史民俗資料館編『長浜の民話―読谷村民話資料3―』一九八一年

(10)登山修『奄美大島瀬戸内町の昔話』(南島昔話資料叢書) 同朋社から近刊予定。

(なお研究発表草稿に全面的加筆したことを付記しておく。)

(やました きんいち・奄美高校)